

令和7年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

令和7年5月27日 秋田県病害虫防除所

- ◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表は令和7年6月24日の予定です。
- ◇病害虫発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。
<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>
- ◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>
- ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。<https://www.e-komachi.jp/>
- ◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病害虫防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	<p>いもち病の感染時期はやや早いと予想されます。余り苗は直ちに処分してください。また、水面施用剤（オリゼメート粒剤、ルーチン粒剤）を使用する場合は、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。</p> <p>斑点米カメムシ類（第1世代）の発生時期はやや早い、発生量は平年並と予想されます。水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行ってください。農道・畦畔、休耕田などの除草は地域でまとまって行ってください。</p>
畑 作	<p>小麦では、赤かび病の発生量が平年並と予想されます。まだ防除を行っていない場合は、直ちに防除してください。</p> <p>大豆では、ネキリムシ類の発生量が平年並と予想されます。播種前にはほ場内やほ場周辺の除草を行うほか、例年被害が見られるほ場では、クルーザーMAXXなどで防除してください。</p>
野 菜	<p>キャベツでは、コナガの発生量が多いと予想されます。注意報第1号を参照し、防除対策を徹底してください。</p>
花 き	<p>りんどうでは、葉枯病の発生量が多いと予想されます。過剰な追肥を控えて過繁茂を避け、薬剤で防除を行ってください。また、ハダニ類の発生量が多いと予想されます。発生初期から薬剤で防除を行ってください。</p>
果 樹	<p>りんごとなしでは、果樹カメムシ類の発生量が多いと予想されます。成虫が次々に飛来し、被害が懸念される場合は、防除対策情報第3号を参照し、直ちに薬剤による防除を行ってください。</p> <p>ぶどうでは晩腐病（花蕾発病）の発生量が多いと予想されます。開花前、落花後、落花7日後に薬剤で防除を行ってください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全県	やや早い	—	やや少ない
	ばか苗病	全県	—	少ない	少ない
	イネミズゾウムシ	全県	早い	やや少ない	平年並
	イネドロオイムシ	全県	やや早い	—	やや多い
	イネミギワバエ (第2世代) (イネヒメハモグリバエ)	全県	早い	やや少ない	少ない
	斑点米カメムシ類 (第1世代) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県 全県 全県	やや早い 早い やや早い	— — —	平年並 やや少ない 平年並
	フタオビコヤガ (第1世代) (イネアオムシ)	全県	やや早い	やや少ない	やや少ない
小 麦	赤かび病	全県	やや早い	—	平年並
	うどんこ病	全県	—	—	平年並
大 豆	ネキリムシ類	全県	平年並	—	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	平年並
ね ぎ (夏どり)	べと病	全県	—	平年並	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	—	やや少ない
キャベツ (初夏どり)	菌核病	全県	—	平年並	平年並
	コナガ	全県	—	多い	多い
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	平年並
	ヨトウガ (第1世代)	全県	—	平年並	やや多い
えだまめ	ネキリムシ類	全県	平年並	—	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	—	平年並
りんどう	葉枯病	全県	—	多い	多い
	リンドウホソハマキ (第1世代)	全県	早い	やや少ない	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ)	全県	—	やや多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	平年並	—	やや少ない
	モニリア病 (実(株)ぐされ)	全県	—	やや多い	やや多い
	黒星病	全県	—	多い	多い
	炭疽病	全県	平年並	—	多い
	輪紋病	全県	平年並	—	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	早い	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	やや少ない	平年並
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 ミダレカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	全県	—	少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	全県	—	多い	多い
キンモンホソガ (第2世代)	全県	—	—	やや多い	
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	多い	多い
ぶどう	べと病	県南部	平年並	平年並	平年並
	芽枯病	県南部	平年並	やや少ない	やや少ない
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病(花蕾発病)	県南部	—	—	多い
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	早い	平年並	やや多い
飼料作物	アワヨトウ(第1世代)	全県	—	—	やや少ない

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
1 いもち病（葉いもち） （全般発生開始期）	やや早い（－）	やや少ない（－）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。

イ 育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における苗いもちの発病箱率、発病地点率はいずれも0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。育苗施設内外の稲わら及び籾殻の確認地点率は、1.2%（平年2.9%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。

イ ベンレート水和剤又はビームゾルによる育苗期のいもち病防除をしなかった場合、いもち病の持ち込みや早期に伝染する可能性があるため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。

ウ 乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。

エ 葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用しなかった場合は、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。散布時期は、移植栽培では6月15日頃（6月12～18日）、直播栽培では6月23日頃（20～25日）である。

オ 箱施用剤又は側条施用剤を使用していないほ場では、感染苗の持ち込みなどにより早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病を確認した場合は、直ちにオリゼメート粒剤又はルーチン粒剤を散布し、その15～20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病を確認した場合は、オリゼメート粒剤又はルーチン粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤又はノンプラス剤）の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 ばか苗病	－	少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 育苗期巡回調査（5月2～3半旬）における発病箱率は0.2%（平年1.9%）、発病地点率は3.5%（平年11.1%）でいずれも低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 イネミズゾウムシ	早い（前年並）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（-/+）。
- イ 有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）による越冬後成虫の侵入盛期は6月2日（平年6月7日）、密度盛期は6月5日（平年6月11日）と推定される（-/ ）。
- ウ 5月1～3半旬の予察灯（6地点）における越冬後成虫の総誘殺数は0頭（平年1.5頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月上旬に越冬後成虫が1株当たり0.3頭（食害株率90%以上に相当）以上の場合は、トレボン粒剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 イネドロオイムシ	やや早い（-）	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。
- イ 前年の発生量から、越冬量は多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 産卵盛期（6月上～中旬）の卵塊数が1株当たり0.5を超える場合は、ふ化盛期（6月中旬）に茎葉散布剤で防除する。ただし、R A Cコード1A、1B、2Bの薬剤に対する感受性が低下している地域では、トレボン粉剤D Lを使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 イネミギワバエ（第2世代） （イネヒメハモグリバエ）	早い（-）	少ない（-）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている（-/-）。
- イ 有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）による第2世代幼虫の発生時期は6月12日（平年6月16日）と推定される（-/ ）。
- ウ 5月4半旬の巡回調査（沿岸部19地点）における1株当たり卵数は0.05個（平年0.29個）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗箱施用剤や育苗箱かん注剤を使用した場合は、あらためて防除をする必要はない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 斑点米カメムシ類 (第1世代) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	やや早い (前年よりやや遅い) 早い (前年並) やや早い (前年よりやや遅い)	平年並 (前年より少ない) やや少ない (前年より少ない) 平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。
- イ 牧草地すくい取り調査(3地点)におけるアカスジカスミカメ越冬世代幼虫の発生時期は早い(－/)、アカヒゲホソミドリカスミカメ越冬世代幼虫の発生時期は平年並だった(±/)。
- ウ 前年収穫期に行った畦畔すくい取り調査から、アカスジカスミカメの越冬量はやや少ない(/－)、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬量は平年並と推定される(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月上旬から繁殖地となる農道・畦畔、休耕田などの除草を地域でまとまって行う。
- イ 水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行う。雑草の生育状況を確認し処理時期が遅れないようにする。
- ウ 一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤及び少量拡散型粒剤は、藻類・表層はく離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層はく離の発生前から発生初期までとする。
- エ 一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 フタオビコヤガ (第1世代) (イネアオムシ)	やや早い (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。
- イ 育苗期巡回調査(5月2～3半旬)における育苗施設内の成虫数は0頭(平年0.1頭)でやや少なく、卵確認地点率は0%(平年2.8%)でやや低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア フェルテラ剤(ブイゲットフェルテラ粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤など)、スピノ剤(プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤など)のいずれも施用せず、食害が多く実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチェーンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DLのいずれかを散布する。

8 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
縞葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	—	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

B 小麦

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 赤かび病	やや早い(—)	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(—/±)。
- イ 秋田地域振興局管内の定点調査(品種:銀河のちから)による出穂期は5月10日(平年差+1日)、仙北地域振興局管内における出穂期(ネバリゴシ)は5月17日(平年差±0日)、平鹿地域振興局管内における出穂期(ネバリゴシ)は5月18日(平年差+1日)だった(±/)。
- ウ 出穂後の5月上～中旬の降水量から、感染量は平年並と推定される(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル(RACコード:3)又はストロビーフロアブル(同:11)を散布する。その後7～10日後に2回目の防除をする。
- イ 2回目の防除は、シルバキュアフロアブル、ストロビーフロアブル、トップジンM水和剤(RACコード:1)、トップジンM粉剤DL(同:1)、イオウフロアブル(同:M2)、石灰硫黄合剤(同:M2)のいずれかを散布する。ただし、1回目と同じ薬剤は使用しない。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤を連用しない。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 うどんこ病	—	平年並(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。
- イ 前年乳熟期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は赤かび病と同時防除が可能である。

3 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
さび病類 (赤さび病)	—	—	平年並	赤かび病との同時防除が可能である。

C 大豆

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ネキリムシ類	平年並（前年より遅い）	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（- / ±）。

イ 有効積算温度計算シミュレーション（JPP-NE T、気象観測地点：秋田）によると、大豆の茎を切断できるタマナヤガ4齢幼虫の発生時期は6月12日（平年6月9日）と予想される（+ / ）。

ウ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬のタマナヤガの総誘殺数は68頭（平年59.1頭）で平年並、カブラヤガの総誘殺数は44頭（平年89.3頭）でやや少なかった（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。

イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーFS30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ツメクサガは年2回発生し、第1世代幼虫は主に6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ 発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレアSCを散布する。

D ねぎ（夏どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 べと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ±）。

イ 5月4～5半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的にジマンダイセン水和剤などを散布し、予防に努める。
- イ 発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：40・49）、ザンプロDMフロアブル（同：40・45）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などを散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤を連用しない。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。
- イ 前年9月の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県北部で発生しやすい。
- イ 多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にベフドー水和剤、ジマンダイセン水和剤、ダコニール1000などを散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。
- ウ 発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげなどの発病部位を取り除き、速やかにファンベル顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤などを散布する。

F キャベツ（初夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 菌核病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ネクスターフロアブル、パレード20フロアブルなどを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 コナガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 能代市防除適期決定ほのフェロモントラップにおける5月1～5半旬の誘殺数は1,301頭（平年262.2頭）で多かった（ /+）。
- ウ 予察灯調査（6地点）において、全ての地点で誘殺が確認され、5月1～4半旬の誘殺数の合

計は355頭（平成54.7頭）で多かった（ /+）。

エ 5月4半旬の巡回調査（山本地域5地点）において、全ての地点で卵が確認され、株当たり卵数は平均9.7個だった（ /+）。

オ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平成0.02頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 5月22日発表の注意報第1号を参照し、防除対策を徹底する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 モンシロチョウ	—	平成並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ /+）。

イ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は、0頭（平成0.01頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 ヨトウガ（第1世代）	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ /+）。

イ 5月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は、0頭（平成0頭）で平成並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

G えだまめ

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ネキリムシ類	平成並（前年より遅い）	平成並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ -/±）。

イ 有効積算温度計算シミュレーション（J P P - N E T、気象観測地点：秋田）によると、大豆の莖を切断できるタマナヤガ4齢幼虫の発生時期は6月12日（平成6月9日）と予想される（ +/ ）。

ウ 秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬のタマナヤガの総誘殺数は68頭（平成59.1頭）で平成並、カブラヤガの総誘殺数は44頭（平成89.3頭）でやや少なかった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア タマナヤガはタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵し、カブラヤガは雑草の枯葉に産卵するので、

播種前には場内やほ場周辺の除草を行う。

イ 例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザー F S 30又はクルーザー M A X Xを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤 F を作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉 2 葉期にカルホス粉剤又はネキリエース K を株元の土壌表面に散布する。

ウ タマナヤガは飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報などに注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ツメクサガは年 2 回発生し、第 1 世代幼虫は主に 6～7 月に発生する。葉脈を残して葉を食害するので、ほ場をよく観察する。

イ 発生が多い場合は、ツメクサガ幼虫の発生初期 (若齢期) にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、ブロフレア S C、ヨーバルフロアブルを散布する。

H りんどう

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 葉枯病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ 5 月中旬の巡回調査における発病茎率は 14.8% (平年 5.8%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。

イ オンリーワンフロアブル、チオノックフロアブルなどの薬剤で防除するが、花の汚れを避けるためにオーソサイド水和剤 80 や Z ボルドーは着蕾期以降使用しない。

ウ 降雨が多いと多発するため、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 リンドウホソハマキ (第 1 世代)	早い (—)	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/+)。

イ 有効積算温度計算シミュレーション (J P P - N E T、気象観測地点：秋田) による越冬世代成虫の羽化始期は 5 月 28 日 (平年 6 月 1 日) と予想される (—/)。

ウ 5 月中旬の巡回調査における発生茎率は 0% (平年 0.05%) でやや低かった (/—)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 茎部に食入後の薬剤防除が難しいため、生長部被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。
- イ ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、直ちにアディオフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤などの薬剤で防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 ハダニ類 (ナミハダニ)	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている (/+)。
- イ 5月中旬の巡回調査における発生茎率は1.1% (前年0.4%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多発してからは防除が困難となるため、葉表に白斑が見られたら直ちにカネマイトフロアブル (RACコード: 20B)、コロマイト水和剤 (同: 6)、バロックフロアブル (同: 10B) などの薬剤で防除する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

I りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 斑点落葉病	前年並 (前年より遅い)	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている (-/±)。
- イ ふじの落花期はかづの果樹センター (鹿角市) が5月18日 (前年差+2日)、果樹試験場 (横手市) が5月16日 (前年差+4日) だった (+/)。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ 高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤 (RACコード: 19)、ユニックス顆粒水和剤47 (同: 9) のいずれかを主剤に加用して使用する。ただし、これらの薬剤は耐性菌の出現を回避するため1回の使用とする。また、ポリオキシシAL水和剤の効力が低下している園地では同剤を使用しない。
- ウ QoI剤 (RACコード: 11) は耐性菌の出現を回避するため、2回以内の使用とし、ベルコート水和剤、有機銅剤などに加用する。
- エ 以下の各薬剤を使用する際は、次の点に注意する。
- ① オキシラン水和剤、キノンドー水和剤40、キノンドーフロアブル、ドキリンフロアブル、ポリオキシシAL水和剤は、落花直後～落花20日後頃の使用は避ける (サビ果)。
 - ② シトラノフロアブル、パスポート顆粒水和剤は、開花直前～落花20日後頃の使用は避ける (サビ果)。
 - ③ ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、芽出し2週間後～落花25日後頃の使用は避ける (サビ果)。
 - ④ ストライド顆粒水和剤は、開花後～落花30日後の使用は避ける (サビ果)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 モニリア病 (実(株)ぐされ)	—	やや多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 5月中旬の巡回調査における花ぐされ発病果そう率は0.5% (平年0.1%) で高く、同地点率は5.0% (平年9.3%) でやや低かった (/+)。
- イ 5月中旬の降水量から、感染量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 実(株)ぐされは見つけ次第、摘み取って焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 黒星病	—	多い(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 5月中旬の巡回調査における発病花そう率は0.4% (平年0.1%) でやや高く、同地点率は5.0% (平年1.8%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。摘果作業の際は発病の有無をよく観察し、発病果実を園内に残さないように注意する。
- イ 過繁茂を防ぐため、新梢などの生育が旺盛な場合は、枝の配置を見直し徒長枝を整理する。
- ウ 防除薬剤は落花25日後頃までは10日間隔で散布し、その後は約2週間間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。散布予定日に降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 炭疽病	平年並 (—)	多い (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/±)。
- イ ふじの落花期はかづの果樹センター(鹿角市)が5月18日(平年差+2日)、果樹試験場(横手市)が5月16日(平年差+4日)だった (+/)。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。
- イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。
- ウ 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
5 輪紋病	平年並（－）	多い（－）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ ふじの落花期はかつの果樹センター（鹿角市）が5月18日（平年差＋2日）、果樹試験場（横手市）が5月16日（平年差＋4日）だった（+/）。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 防除薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ 枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	早い（前年並）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。
- イ 成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月中旬から、県中央部・県南部では6月上旬からネオニコチノイド系剤などの殺卵剤を散布する。
- ウ 交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。
- エ 園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。
- オ スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるので、落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	－	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は、合計0頭（平年0.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ナミハダニの発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ リンゴハダニの発生が見られる園地ではバロックフロアブル（RACコード：10B）などを散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の

薬剤も1回の使用とする。

エ ダニサラバフロアブル（RACコード：25A）、スターマイトフロアブル（同：25A）、ダニコングフロアブル（同：25B）は作用点が同一の薬剤であるため、いずれか1回の使用とする。

オ 以下の各薬剤を使用する場合は、次の点に注意する。

- ① オマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。
- ② コロマイト乳剤は、落花後1か月間（サビ果）、高温時（黄変落葉）に散布しない。また、パスポート顆粒水和剤、ストライド顆粒水和剤及びスミチオン水和剤40は本剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ③ カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。また、マイトコーネフロアブルはスミチオン水和剤40と混用しない（黄変落葉）。
- ⑤ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑥ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑦ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ⑧ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 ミダレカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 5月中旬の巡回調査における被害花そう率は0%（平年0.2%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、ジアミド系剤（サムコルフロアブル10、エクレスシルSEなど）、ディアナWDG、オリオン水和剤40のいずれかを散布する。

イ オリオン水和剤40は、落果のおそれがあるので開花後1か月間は散布を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（4地点）における5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は124頭（平成73.6頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 5月27日発表の防除対策情報第3号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10 キンモンホソガ (第2世代)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 前年の発生量から、越冬量は平成並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は摘み取って適切に処分する。
- イ 発生が多い園地では、県北部では6月中旬、県中央部・県南部では6月上旬にモスピラン顆粒水溶剤やバリアード顆粒水和剤などを散布する。
- ウ パーマチオン水和剤は、落花1か月後以降に使用し（サビ果）、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

J なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	—	平成並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平成並と予報されている（ /±）。
- イ 潟上市予察ほにおける果そう葉の初発日は5月13日（平成5月18日）でやや早かった（ /+）。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病果そう基部率は0%（平成0.1%）、同地点率は0%（平成6.5%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、園外へ搬出して処分する。
- イ 防除薬剤は10日間隔で散布し、降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。幸水は、本病に弱いので特に注意して防除する。
- ウ 有袋栽培の場合は必ず薬剤を散布した後に袋をかける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平成並と予報されている（ /±）。

イ 5月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は0%（平年0.1%）、同地点率は0%（平年36.7%）でいずれもやや低かった（-/）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。

イ 不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ 袋かけ前の防除を徹底し、散布後、早めに袋をかける。

エ 発生が予想される園地では、ナリアWDG（RACコード：11・7）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）を散布する。ただし、ユニックス顆粒水和剤47は単用せず、主剤に加用して散布する。

オ 多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤など（同：19・M4）を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシ剤の使用回数は3回以内とする。

カ 防除薬剤は10日間隔で散布し、降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3 輪紋病	早い（前年より早い）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ 潟上市予察ほにおけるいぼ病斑からの柄孢子溢出開始日は、5月12日（平年5月20日）で早かった（-/）。

ウ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（-/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は6月中旬までに削り取り、直後にその跡部にトップジンMペーストを塗布する（塗布は3回以内）。

イ 発病しやすい品種は、6月中旬までに袋かけをする。

ウ 防除薬剤は10日間隔で散布し、高温、多雨の場合は散布間隔を7日とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	早い（前年並）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ 前年収穫期の発生量から、越冬量は平年並と推定される（-/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ 成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するので、県北部では6月中旬から、県中央部では6月上旬からネオニコチノイド系剤などの殺卵剤を散布する。

ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

エ スミチオン水和剤40とパーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

オ 園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 5月中旬の巡回調査におけるナミハダニとリンゴハダニの葉当たり発生頭数は、合計で0頭 (平年0.0頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- イ 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため、殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。
- エ コロマイト水和剤は葉が柔らかい時期 (5～6月) や高温・乾燥時、また、樹勢の弱っている場合は、葉に薬害 (黄変落葉) を生じるおそれがあるので散布しない。
- オ ダニオーテフロアブル (RACコード:33) を使用する園では、オキシラン水和剤などの銅を含む製剤を使用しない (銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下) 。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ、 リンゴモンハマキ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 5月中旬の巡回調査における被害果そう葉率は0% (平年0.3%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い園地ではジアミド系剤などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 防除適期決定ほ (3地点) における5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は120頭 (平年56.9頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 5月27日発表の防除対策情報第3号を参照して防除する。

8 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
アブラムシ類 (ユキヤナギアブラムシ)	—	平年並	平年並	シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。

K ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ベと病	平年並 (—)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 果樹試験場 (横手市) における展葉期は、キャンベル・アーリーが5月2日 (平年差+2日)、巨峰が5月4日 (平年差+1日)、シャインマスカットが5月6日 (平年差+3日) だった (±/)。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病葉率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア アリエッティ水和剤は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、落花7日後までに使用する。
- イ ホライズンドライフフロアブル、オロンディスウルトラSCは果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブルは果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、散布時期に注意する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、QoI剤 (RACコード:11)、QiI剤 (同:21)、CAA剤 (同:40)、シモキサニル (同:27) を含む薬剤及びエトフィンフロアブル (同:22) の使用は1~2回とし、同一RACコードの薬剤を連用しない。特に、QoI剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除薬剤として使用しない。また、ゾーベックユニベル顆粒水和剤 (RACコード:49・M3) は1回の使用とする。

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
2 芽枯病	平年並 (—)	やや少ない (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 果樹試験場 (横手市) における展葉期は、キャンベル・アーリーが5月2日 (平年差+2日)、巨峰が5月4日 (平年差+1日)、シャインマスカットが5月6日 (平年差+3日) だった (±/)。
- ウ 5月中旬の巡回調査における発病芽率は、0% (平年1.3%) でやや低かった (/—)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病枝は剪去し、適切に処分する。
- イ 開花期間に雨が多いと翌春に多発するおそれがあるので、オーシャイン水和剤 (RACコード

：3)、トップジンM水和剤(同：1)などを開花前に散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用は1～2回とし、連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 灰色かび病	—	平年並(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ 5月中旬の巡回調査における発病葉率は0%(平年0%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前(袋かけ前)に払い落とす。

イ 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、適切に処分する。

ウ 花穂の防除が重要であることから、開花前と落花後の散布間隔を10日以上空けない。

エ 開花直前にゲッター水和剤(RACコード：10・1)、チオノックフロアブル(同：M3)、トレノックスフロアブル(同：M3)、フルピカフロアブル(同：9)、ロブラール水和剤(同：2)、SDHI剤(ネクスターフロアブル、パレード15フロアブルなど)(同：7)、ミギワ20フロアブル(同：52)のいずれかを散布する。

オ 落花直後にゲッター水和剤、ジチオカーバメート剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤、SDHI剤(フルーツセイバーなど)、QoI剤(アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブルなど)(RACコード：11)、スイッチ顆粒水和剤(同：9・12)のいずれかを散布する。

カ 落花7日後にQoI剤、スイッチ顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル(RACコード：3)のいずれかを散布する。

キ フルーツセイバーは果粒が小豆大以降の散布により、ミギワ20フロアブル、カナメフロアブル、アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。

ク カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害(葉の白化)が発生するおそれがあるため混用しない。

ケ チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ～クに記した薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、いずれも1回の使用に限定し、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
4 晩腐病(花蕾発病)	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病花穂は摘み取り、適切に処分する。

イ 開花前にジチオカーバメート剤(ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブルなど)(RACコード：M3)、ゾーベックエニベル顆粒水和剤(同：49・M3)のいずれかを散布する。

ウ 落花直後にジチオカーバメート剤、ゾーベックエニベル顆粒水和剤、スイッチ顆粒水和剤(R

ACコード：9・12)、QoI剤(アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブルなど)(同：11)のいずれかを散布する。

エ 落花7日後にオンリーワンフロアブル(RACコード：3)、スイッチ顆粒水和剤、QoI剤のいずれかを散布する。

オ アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル及びスイッチ顆粒水和剤は、いずれも果粒が大豆大以降の散布により果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前までに散布する。

カ ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くイ～エに記載した薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用は1～2回とし、かつ同一RACコードの薬剤は連用しない。

キ チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルの幼果期～袋かけまでの散布は、果房の汚れや果粉の溶脱を起こすことがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	早い(－)	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(－/+)。

イ 横手市予察ほにおける黄色粘着板へのチャノキイロアザミウマの5月1～4半旬の誘殺数は0頭(平年0.0頭)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が見られたら、ディアナWDG(RACコード：5)、テッパン液剤(同：28)、ピレスロイド系剤(スカウトフロアブル、バイスロイドEWなど)(同：3A)、ネオニコチノイド系剤(ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤など)(同：4A)を散布する。なお、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。

イ ダントツ水溶剤は小豆大期以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大期以降の散布で果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前又は袋かけ以降に使用する。

L 飼料作物

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 アワヨトウ(第1世代)	－	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

ア 糖蜜トラップ調査(2地点)における5月1～4半旬の侵入世代の総誘殺数は0頭(平年0.6頭)でやや少なかった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和7年5月22日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（5月24日～6月23日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高くなるでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

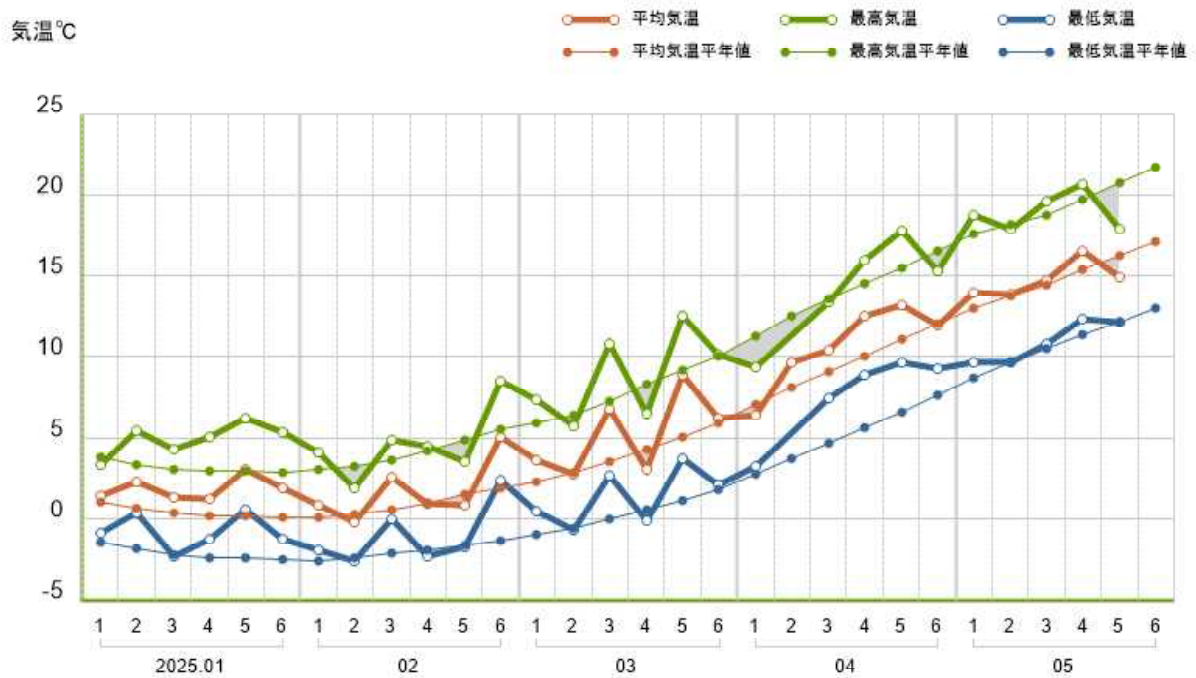
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

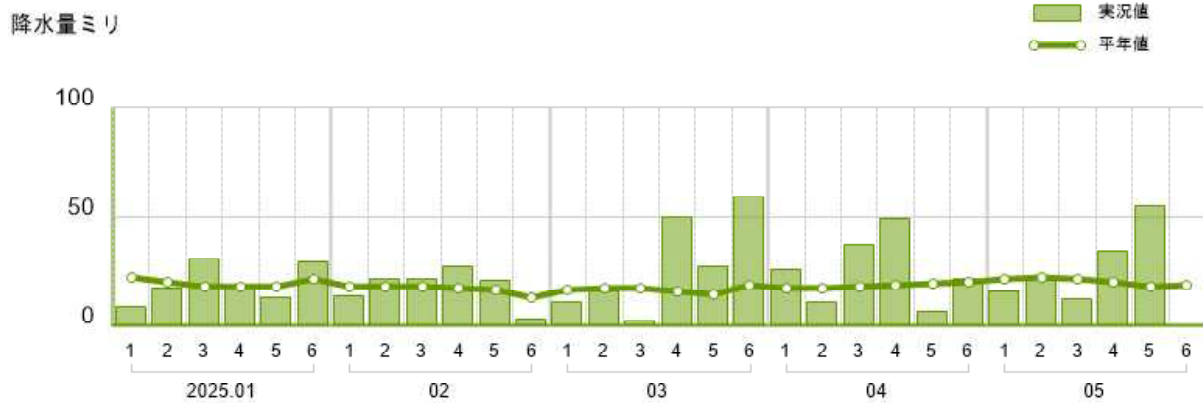
	低い	平年並	高い
5/24～5/30（1週目）	40%	40%	20%
5/31～6/6（2週目）	20%	30%	50%
6/7～6/20（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきで示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「-」

予報内容の発生時期や発生量の「-」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「-」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「-」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40%で高い（多い）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和7年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

誤飲を防ぐため、**施錠された場所に保管する等保管管理の徹底**

誤飲防止のため移し替えは**厳禁!**

確認しよう! 農薬ラベルによる使用基準の徹底確認

使用前に必ずラベルで作物名・使用方法・防護装備の確認をしましょう!

〇〇××剤

殺菌剤

農薬散布は無風または風が弱い時

住宅地等で農薬を使用する際の**周辺への配慮及び飛散防止対策の徹底**

近隣住民への事前告知

看板の設置等周囲に配慮

土壤くん蒸剤立ち入り禁止

土壤くん蒸剤を使用した後の**適切な管理の徹底**

使用前、周囲よく見てラベル見て

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/

農薬の適正使用 農林水産省

検索



令和7年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

秋田県・秋田県植物防疫協会
令和7年6月1日～8月31日

問合せ先

秋田県病虫害防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251